

ポール・ロワイヤルの隠士：A. ル・メートル

水 野 豊*

Le solitaire de Port-Royal: Antoine Le Maître

Yutaka MIZUNO*

はじめに

サン・シラン Saint-Cyran (ジャン・デュヴェルジエ・ド・オランヌ Jean Duvergier de Hauranne) の精神的弟子、あるいは後継者として、ブレーズ・パスカル Blaise Pascal やアントワヌ・アルノー Antoine Arnauld を筆頭にあげることは恐らく正しいし、二人の輝かしい業績や後世への影響力から判断して正当なものであろう。

しかし、サン・シランが弟子たちに解いた思想、「世俗の放棄」や「苦行生活」¹⁾を最初に実践したのは、アントワヌ・ル・メートル Antoine Le Maître²⁾であった。彼をサン・シラン後継者の代表に仕立て上げるつもりはないが、ポール・ロワイヤル Port-Royal の人々から「隠士の父 Le Père des solitaires」³⁾と呼ばれた彼は、これまで研究対象にされたことがほとんどない⁴⁾。

この小論は、名声を博した弁護士としての地位を捨て、サン・シランの教えに最も忠実な一番弟子として、生涯隠棲生活を送ったA.ル・メートルに焦点を当て、ポール・ロワイヤルの隠士たちの生活と彼らによるサン・シラン思想の受け止め方、師の教えの実行が如何になされたかをル・メートルの生涯に沿って考察したい。

おいたちと家族

アントワヌ・ル・メートルはイザーク・ル・メートル Isaac Le Maître とカトリーヌ・アルノー Catherine Arnauld の長男として、1608年パリに生まれた。イザークは国務評定(顧問)官 Conseiller du Roi で会計院常任審査官 Maître ordinaire en sa Chambre des Comptes の肩書をもつ著名人であり、母カトリーヌはアルノー兄弟の年長姉である⁵⁾。

カトリーヌは10才のときすでにアルノー家の家事を担い、13才のときイザークに求婚された。だが、幼すぎるとして父に反対され、三年の期間をおいて再び求婚がなされ、今度は認められた。カトリーヌ16才、1606年のことである。アントワヌが生まれたあと、母は四人の男子を生んだ。

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

弟たちの名前はジャン Jean, シモン Simon, ルイ・イザーク Louis-Isaac, シャルル Charles とい⁶⁾、このうち、シモンとルイ・イザークはのちに兄と同様ポール・ロワイヤルの隠士となった。シモンはル・メートル・ド・セリクール Le Maître de Séricourt, ルイ・イザークはパスカルとの対話で有名なル・メートル・ド・サシ Le Maître de Sacy である。

1616年ル・メートル夫人となったカトリーヌは、夫との不和から父母の家に戻って五人の息子を育て、かなり頻繁にポール・ロワイヤル修道院に通っていた。五人の息子たちは1619年パリにきたフランソワ・ド・サール François de Sales を伯父アルノー・ダンディ Arnauld D'Andilly に紹介され、司教から祝福 bénédiction を与えられた。この年、彼らの祖父アルノーが死に、祖母と母が彼らの養育にあたった。まもなく彼らは叔父にあたるアントワヌ・アルノーと共にコレージュ・ド・リジュー Collège de Lisieux へ寄宿生として入学させられた⁷⁾。

長男アントワヌは法律を勉強し、二十歳になるころにはその若さにもかかわらず有名になっていた。21才のとき、口頭弁論で聴衆から拍手喝采された。こうして、異例の若さで弁護士となった彼は28才でセギエ大法官 Chancelier Séguier に認められ、國務院評定官 Conseiller d'Etat の資格を得た⁸⁾。

1634年、彼は「パリで最も美しく賢明な女性のひとり」と結婚を考えていた。彼はこの問題を叔母アニェス教母 mère Agnès に手紙で相談した。しかし、叔母からの返事は得意満面で少々思いつまりのあった彼を諫める内容のものであった。叔母の説得と甥の弁明のやりとりがしばらく続き、結局結婚するまでには到らなかった⁹⁾。

サン・シランとの出会いと隠棲

ポール・ロワイヤルにおけるジャンセニスム運動の始まりを何時からとみるかは、研究者によってまちまちであるが、A.ル・メートルが隠棲する1637年と見なす説も有力なひとつである。『隠れたる神』Le Dieu cachéの著者ゴールドマン Lucien Goldmann もその一人で、サン・シランの教えによる「新しいイデオロギーの出現」と見なす¹⁰⁾。ゴールドマンの思想に共鳴するか否かは、ここではひとまずおくとして、この事件が当時の世論やポール・ロワイヤルの関係者に与えた衝撃の大きさは十分この説に説得性をもたせている。

A.ル・メートルは伯父アルノー・ダンディの家にしばしば出入りし、1637年夏ダンディ夫人が病にふせている折りもよくこの家にきていた。サン・シランが病人の死期の近いことを知り、見舞いと共に、夫人に宗教的死の準備について話をしにきた。伯母のベッドのそばで、居合わせたA.ル・メートルもこの話を熱心に聞いていた。何度もサン・シランの素晴らしい話を聞くうちに、心うたれて、伯母の死後まもなく彼はサン・シランの下で「回心」conversion した¹¹⁾。伯父たちの反対にもかかわらず、彼はサン・シランの教えどおり「世間から離脱」し、孤独と沈黙を旨とする「祈りと苦行」の生活に入る決心をした。彼は自分の決意を大法官宛の書状によって公表した。この年12月のことである。

「数ヵ月前に神が私のもとにおいでになり、生活を変えるよう仕向けられました。あなた様への尊敬の念を欠き、忘恩の罪を犯すようにも思えます。身に余るご好意にもかかわらず、あなた様に私の心の変化をお伝えもせずかような大事な私の決意を実行に移してしまいました。私は光栄にもあなた様が私にお与え下さった職業もかって私が俗世間において希望したあらゆるものも放棄します。私は私に残された日々を苦行と神に仕えるため隠棲します。…（以下略）」¹²⁾

8月の「回心」以来、サン・シランの指導下にはいったA.ル・メートルは、隠棲のためにはアルノー・ダンディーの住まいは好ましくないとするサン・シランの意見に従い、シャルトルー修道院近くの師の家にしばらく滞在した。これが10月のことで、このころ弟ド・サシと共にヘブライ語からの聖書の翻訳を準備していたと言われる¹³⁾。

A.ル・メートルの隠棲決意のあと、数名の人が彼にならうが、弟ド・セリクールが時期的に早く、その後クロード・ランスロ Claude Lancelot、弟ド・サシなどが加わる。

母ル・メートル夫人がまもなくパリのポール・ロワイヤル修道院のそばに小さな建物を用意してくれたので、彼らはそこで隠棲生活を始めた。1638年1月のことである¹⁴⁾。

しかし、そこでの暮らしも長くは続かなかった。ほどなくパリの大司教が女子修道院の前に若い青年たちが住むのは好ましくないとの見解を示し、同年5月ころシュヴルーズ Chevreuse にある「田舎のポール・ロワイヤル」Port-Royal des champs へ移動せねばならなかった。しかし、そこでの平穏な生活も短いものだった。というのは、リシュリユー Richelieu の命によりサン・シランが逮捕され、検察官らが彼らのところへ押し寄せ、尋問すると共に隠士グループの解散を命じたからである。わずか二ヵ月余りで彼らは分散せねばならなかった¹⁵⁾。

サン・シランの逮捕は、表向きには隠士問題であり、その方が世論を説得させやすかった。だが、真相はサン・シランの政治問題発言や他の宗教問題発言をリシュリユーが危惧したためといわれる¹⁶⁾。隠士たちが田舎のポール・ロワイヤルに戻ったのは1640年始めで、A.ル・メートルら五人がこっそり帰ってきた¹⁷⁾。やっと隠士グループは身を落ち着けることができた。彼らは人々から「ソリテール」Solitaires とか、「ポール・ロワイヤルの方々」Messieurs de Port-Royal と呼ばれた。

隠遁生活と小さな学校

多くの当時の文献が明らかにしているように¹⁸⁾、初期ポール・ロワイヤルの隠士たちの生活は各宗派の修道士や聖職者のような日課規程や規則があったわけではない。

ルネ・タヴノー René Tavenaux は隠士生活を「福音書以外にいかなる規則もなし Nulle règle que l'Evangile」¹⁹⁾の表題で、A.ル・メートルの書きものを援用している。われわれもそれを提示しておきたい。

「[...] ここではいかなる共同体形式も存在しない。同様に装いを凝らした僧服の形や色も存在しない。誓願も祈願も、たとえそれらが他の場所で名誉とされ、敬われようと、神の導きでこの修道院へ案内された人々においてはしないのである。いかなる特別な規律の制定もなく、住まいの安定性もなく、福音書以外に規則もなく、カトリックの普遍的慈愛の絆以外に絆もなく、天国の獲得という利害以外に個別的にも共同的にも利害はない。神の精神がそこへ導くのでなければ誰も来ず、神の精神がそこになければ誰も住まない全く自発的で自由な隠遁の場所にすぎない。そこにいるのは通常の一般的自由により共に生活する友人たちであり、国王もおまかせになっている。だが、すべての人々に対して広められたイエス・キリストの血と聖霊によって人々の心に広められた血の恩寵が、一層密接で強固で純粋な結びつきで一緒に合流したキリスト者の友人たちであり、最も強く、最も親密な俗人的友情で結ばれている²⁰⁾。」

サン・シランの「祈りと苦行」の教えはこのように「世俗を離脱」し、「孤独と清貧」の生活を実際に実行することで実現された。「世俗の離脱」といっても修道士になることではなく、「孤独」といってもひとりだけで離れて暮らすことではない。宗教的形式や秩序にこだわり過ぎず、各人の意識に即した「隠棲」の仕方が受容された。

実際、この隠士たちの数はポール・ロワイヤルの歴史を通じて、25名を越えないといわれ、この中には数ヶ月の人も含まれるため、同じ時期には10名程度であったと推定される²¹⁾。したがって、A.ル・メートルのように死ぬまでの20年間終始隠棲したものはごくまれである。

さて、隠士たちの日常生活とはどのようなものだったのだろうか。先にA.ル・メートルの書きものを引用したが、そこでは一切の規則や規律が否定されていた。しかし、長期間住んでいれば自然に習慣化される生活のリズムができあがる。もうしばらくサント・ブーヴとタヴノーの描く彼らの生活を追ってみよう。

祈りと仕事と研究が彼らの生活にリズムをつけていた。彼らは毎晩深夜一時にサングランの部屋に集まり、朝課 *matines* を行った。「感謝の歌」*Te Deum* を大声で歌い、詩篇の朗読は小声で行われた²²⁾。

食事でも共同で取った。特に制限はなかったが、魚は不足しており、肉は各人が健康維持のため必要最少量を食した。断食の時期にはかなり厳しい制限をしたが、これもサン・シランの教えを守り、各人の能力に応じて様々であった。重要なのは個人の心構えなのであって、決して無理な過度な「苦行」が良しとはされなかった²³⁾。

食事の後、各自一人で付近の森や丘を散歩した。このレクリエーションの時間は友人を招いたり、世俗の人と接触する者もあった。「接触」*contacts* といえば、サン・シランはこれをかなり厳しく制限していた。特に婦人との長い会話は彼の目には悪魔の罠に写った。自発的にすべてに絶対を求めたA.ルメートルはいかなる婦人にも決して話かけないばかりでなく、誰にも話かけないという規則を自らに課していた。サン・シランはこのような行き過ぎを非難し、改めさせた²⁴⁾。

隠棲生活の制約は見掛け上厳しく実際は柔軟であった。A.ル・メートルも例えば修道女に弁

護が必要なときは、通常の日課を中断し、ひととき世間に戻ることもあった。各自がそれぞれ自分の得意な領域を活かし、畑を耕すものから、靴を造るものまでいた²⁵⁾。

仕事や職業の面でいえば、彼らに最も大切で辛い「苦行」とされたのは「小さな学校」Petites écolesの教師としての仕事であった。すでに1638年に隠士たちは二三人の子供たちを預かっていた²⁶⁾。サン・シランはヴァンセンヌに幽閉されたが、そこから弟子たちに自分の教育にかんする情熱を語る手紙を書いている。学校設立前の子供たちもサン・シランの親族につながるものたちで²⁷⁾、彼が弟子たちに託したのである。

「私の心中にある子供たちに対する愛情と重視すべき信仰や恩寵に対する無配慮を如何に私が憂慮するかをあなたに読み取っていただけたと思います。私が教会の神学校のような家を建てる構想を考えたとき、子供たちの無垢を維持しなければ彼らが良き聖職者となるのは難しいと思いました。私はパリ市内全体で自分が選ぶ六人の子供にしか私の考える教育はできないと思いました。私と出会い、神から祝福されることによって、特別に優秀なラテン語教師と彼らの意識を正しく導くすぐれた聖職者を彼らにつけようと考えました。後者についてはすでに私の手中にあるので、子供たちに言語を教えるに最も適した20才から25才の人物を考えました。しかし、私の牢獄入りでこの構想は崩れてしまいました²⁸⁾。」

『ノートル・ダム・ド・ポール・ロワイヤル修道院過去帳補遺』Supplément au Nécrologe de l'Abbaye de Notre-Dame de Port-Royalにあるサン・シランのこの手紙には、学校設立の具体的な計画が明らかにされている。実際に「小さな学校」が発足するのは、1646年サン・シランの死後三年たってからである²⁹⁾。隠士たちと敵対するジェズイット（イエズス会）が学校教育に力をいれ、数万人の生徒を擁していたのに比較して、これはわずか六人を教育しようというまさにエリート育成の学校を目指したのであろう。

小規模な学校に過ぎないのに、パリに出来たこの学校はジェズイットの圧力で追われ、田舎のポール・ロワイヤルと二・三の親ジャンセニスト派の家に分散した。1656年には解散命令が出て、1660年には廃止に追い込まれた³⁰⁾。わずか十余年の期間に過ぎないが、『ポール・ロワイヤル文法』la Grammaire générale et raisonnée de Port-Royal (1660) も『ポール・ロワイヤル論理学』la Logique de Port-Royal (1662) もこの学校を念頭に書かれたし、パスカルの『幾何学の精神について（幾何学入門）』De l'esprit géométrique et de l'art de persuader (1657) も同様である。

さて、A. ル・メートルら隠士たちは1648年パリにいた修道尼たちが田舎のポール・ロワイヤルに戻ってくると、それまで彼らが使っていた修道院の建物（尤も彼らは医務舎を使用しただけだが）を明け渡し、丘の上のグランジュ Grangeの農家を改築して引越した。1679年の解散までそこに住むことになる³¹⁾。1650年に「小さな学校」が移ってきたのもこのグランジュにである。

幼いジャン・ラシーヌ Jean Racine がグランジュの学校に入ったのはこの頃である。彼は幼児期に相次いで父母を亡くした孤児だった。だが、彼が隠士たちから教育を受けることになったの

は、単なる偶然ではない。彼の祖父母はポール・ロワイヤルと深い関係をもっていた。祖父は隠士たちが一時身を寄せたラ・フェルテ・ミロン La Ferté-Milon の家の提供者であり、祖母はその頃ポール・ロワイヤル修道院の修道女のひとりであった³²⁾。

われわれは今一度サン・シランの「小さな学校」設立理念に戻ろう。先に引用した手紙とは別に、A.ル・メートル宛の手紙がある。日付が1643年2月なのでサン・シランがヴァンセンヌから釈放される直前のものということになる。彼はこの中で孤児の教育に情熱をもち、何人かを自分の修道院（ブレンヌのサン・シラン修道院）へ入れたことを語った後、次のように弟子に書いている。

「私がこうした些細なことをあなたに話すのは、如何に私が子供たちを愛しているかを知ってもらいたいためです。彼らには愛と母親の乳房が必要だとカリタスがいうように、ヴァンセンヌの森で私が決意したことはこの歳で子供たちの面倒をみ、乳母をあたえ、服や下着を買いあたえることです。遠くまで父も母もない幼い孤児を捜しにいき、私の修道院で育てたいとさえ思ったのです³³⁾。」

サン・シランの「苦行」思想のひとつは、慈善や施しであり、これをさりげなく弟子たちに手紙で伝え、決して強制したり押し付けたりはしない。A.ル・メートルは師の意志を忠実に受け継ぎ、これを実行した。ラシーヌの場合もそのひとつと見なせよう。

A.ル・メートルが少年ラシーヌを非常に可愛がり、父親がわりのつもりでいたことは1656年3月に書かれた短い手紙 *billet* によって知られる。

「我が子よ *Mon fils*」の書き出しで始まるこの手紙は書物の貸し借りの話題やラシーヌの近親者に宜しく伝えて欲しいという簡単な内容であるが、終わりの部分には、「さようなら、我が息子よ。パパがあなたを愛しているように、ずっとパパを愛して下さい。時々手紙を下さい³⁴⁾。」とある。

この手紙を引用したF.デルフォージュもA.ル・メートルとラシーヌの関係について確固たる結論を出さぬ方がよいとしながら、ル・メートルが16才の少年に注いでいた並々ならぬ愛情を認め、将来弁護士にしたかったことに触れている³⁵⁾。この頃、A.ル・メートルはすでに48才であり、脚の痛みに苦しんだり、熱病に悩まされたりしていた。

さて、A.ル・メートルが隠棲中におこなった文学史上の仕事について見てみよう。すでに触れたが、ヘブライ語からの新約聖書翻訳については弟ド・サシに協力した程度であろう。最近雑誌に載せられた「ポール・ロワイヤル年表概略」によれば、1648年に『聖ベルナルの生涯』 *La Vie de saint Bernard* を書き、1649-50年に聖ベルナルの諸著作の翻訳をおこなっている³⁶⁾。この聖人はポール・ロワイヤルがその流れを継承したシトー会の初期創始者のひとりである³⁷⁾。

そして、もうひとつのA.ル・メートルが我々に残していった仕事、これは、章をあらためて論じたい。

「高等法院の弁護士からの手紙」と晩年

パスカルがプロヴァンシアル論争に加担し、匿名で18通を公刊したため、この書簡形式の論争文の作者は一体誰かという作者当ての推量が当時盛んになされた。A.ル・メートルも作者として容疑をかけられた一人である³⁸⁾。『プロヴァンシアル』Les Provinciales³⁹⁾の作者がパスカルだと世間に知れたのは「第十八の手紙」が刊行された二年後、1659年のことである⁴⁰⁾。

さて、最後の「第十八の手紙」が出た三ヵ月後、1657年6月今度は『高等法院の一弁護士から友人にあてた手紙』Lettre d'un Avocat au Parlement à un de ses amisが出た。この文書も匿名で現在も作者をめぐって議論がある⁴¹⁾。しかし、最も有力な説はA.ル・メートルがパスカルの協力を得て書いたとするものである⁴²⁾。

この「手紙」の大まかな概要に触れると、ローマ教皇アレクサンドル七世 Alexandre VIIがジャンセニウス Jansénius の著書『アウグスチヌス』Augustinusにおける五命題の断罪を決定し、教皇庁よりフランス国王および聖職者総会に伝えて、ジャンセニウスの異端を認める信仰宣誓文に全聖職者の署名を迫った。この教皇回勅は、さらにフランス高等法院の自立制をも脅かす権力的命令であった。ジャンセニウス擁護の立場にたつポール・ロワイヤルの人々は「ガリカニスム」gallicanismeの強い高等法院にこの不当な弾圧を阻止する望みを託した。ジェズイットの働き掛けでこのような事態が生じたとして、教皇の「不可謬性」の問題をも論じたこの手紙は『プロヴァンシアル』同様、五命題の断罪は事実と反し、異端審問所を設置して強制的に信仰宣誓文に署名させるのは権力の乱用だと主張すると共に、高等法院の奮起と「手紙」の著者への同調を促したものである⁴³⁾。

この「文書」の中で、著者には修道院の院長をしている息子があって、息子が自我をはり宣誓文への署名を拒否した場合、聖職禄を没収されること、また友人の方にも大学で勉学中の息子がおり、伯父さんから受け継ぐはずの聖職禄を逸する可能性があることを指摘している。こうした人物設定により読者にことの内容を分かりやすく説明し、共感を得ようとする手法は『プロヴァンシアル』を継承するものであり、具体的に現在窮地に陥っているある聖職者の例も読者の同情をひく。

しかし、文面や文体だけでその著者を特定することは、非常にむずかしい。ただ、隠棲前から高等法院に詳しく、隠棲後も関係者を友人にもっていたA.ル・メートルならこの文書が書けたことは容易に想像できる。

しかしながら、A.ル・メートルとパスカルが共同でこの文書を完成させたとしても、どのように協力しあったのか我々には知るよしもない。また他の協力者のあり得たことも否定できない。著者を伏せねばならない当時の状況からもこれ以上のこの文書の解明は困難と判断せざるをえない。

A.ル・メートルとパスカルの関係についてはこれに触れている文献はほとんど皆無で、1656年8月にこの二人がアルノーやサングランらと一緒に夕食を共にしていること位である⁴⁴⁾。J.メ

ナールは彼の論文「ポール・ロワイヤル・デ・シャンでのパスカルの滞在」で、二度の短い滞在を認めているが⁴⁵⁾、「文書」の時期とかなりずれがある。我々としては、アルノー、ル・メートル、パスカルら限られた数人が秘密のうちに集まるか手紙のやりとりでこの「文書」作成をおこなったと想像する以外にない。

A.ル・メートルは1658年11月ポール・ロワイヤル・デ・シャンで仲間の隠士たちや教え子たちに惜しまれながら死んだ⁴⁶⁾。教え子の一人、トマ・デュ・フォッセ Pierre Thomas du Fossé は師を語って次のように述べている。

「彼は特別に私に親切にしてくれた。[...] 特に古典語と諸科学に関しては、非常に有能な師として以来私が忘れたことのない授業をしてくれました。[...] 彼は徐々に自分の完璧な方法に基づいて私を育てることに専念した。詩人たちや雄弁家たちの作品の一部分を読んでもくれたり読ませたりして、読書法や話術法やあらゆる美の鑑賞法を教えてくれました。また、詩や散文を読むとき魅力的な彼の肉声で偉大な雄弁家のように発声方法を教えてくれました。その他、上手な翻訳に必要な規則や原書に忠実で格調高くエレガントな翻訳術の困難さと重要性を教授されました⁴⁷⁾。」

恐らく他の生徒たちもこれに似た印象や彼に対する恩義を感じていたのではなかろうか。ところで、アンリ・ブレモン Henri Brémont はフォッセの同じ部分を引用して、ル・メートルがサン・シランの教えに背き、生徒たちに雄弁術や美学を教えたと判断している。彼はそこに聖霊に対する罪や宗教者としての腐敗を見ようとするのである⁴⁸⁾。

しかし、これまで考察してきたようにサン・シランの弟子たちへの教えとは、自らには厳しい苦行と祈りを課すが、貧しい者や幼い者へは温かい慈愛の心で接することであった。前述したフォッセもル・メートルの精神を受け継ぎ、隠士グループの仲間に加わっている。なるほどラシーヌのようにポール・ロワイヤルから抜け出して偉大な劇作家となったものもあるが、彼とてもポール・ロワイヤルを弁護する「略史」を残した。

隠士グループは一見閉鎖的社會を構成しているように見受けられるが、パスカルのような俗界の人物も受け入れている。時の権力者からは危険な思想集団として弾圧や迫害を受けたが、権力者が恐れていたのは集団の規模でも好戦的姿勢でもなかった。王権や宗教支配層にとって異分子の存在が目障りであったのだ。H.ブレモンは17世紀ジェズイットの流れにのった立場からポール・ロワイヤルを考察しており、この批判が的を射ているとは思えない。

H.ブレモンはまた、サント・ブーヴの『ポール・ロワイヤル』を評して、「彼（サント・ブーヴ）はアンジェリック教母の修道院や改革以外に他のそれらを知らず、サン・シラン以外に他の指導者を知らず、ル・メートル以外に他の苦行者を知らない⁴⁹⁾」と言っている。

確かにロマン主義の批評家が好んだ題材かも知れない。だが、如何に当時類似する事件や人々があつたとしても、それを根拠にポール・ロワイヤル運動の独自性が失われるとは思えない。

むすび

ポール・ロワイヤルを中心とするジャンセニスム運動を考える上で、サン・シランの影響力の重要性は恐らく異論のないところであろう。一番先に直接彼の指導下に入ったA. ル・メートルは師のよき理解者であった。ル・メートルは実際サン・シラン思想の最も忠実な実践者であり、隠士グループの中で「父」となった。その二十年の隠遁生活は模範的隠士として皆に敬愛された。また、「小さな学校」の教師としてもサン・シランの意志を受け継ぎ、生徒たちに強い愛情で接し全力を注いだ。サン・シランの中心思想である「苦行」を自ら率先して実行したのも彼である。時にはその行使が行き過ぎ、師から窘められて反省したこともあった。キリスト教に帰依する者として「聖書」の普及や聖人の研究にも功績を残した。得意な弁論術も忘れたわけではなく、生徒にその必要性を解いた。迫害に対する論争ではアルノーやパスカルほど表面的に出ていないが、決して何もしなかったわけではなく「高等法院の弁護士からの手紙」は彼のものと推定される。

ただ、このように典型的で模範的「ポール・ロワイヤルの隠士」を十全に考察するには如何にも資料不足であり、各文献が彼を断片的にしか語ってくれない不備がある。また、他の重要人物については全集なり、人物研究なりが存在するが、彼についてはそれがない。

現在のジャンセニスム研究、パスカル研究の第一人者であるジャン・メナールは最近日本での講演の際、「一つの研究領域全体が探究されるべきで、パスカルだけが取り上げられるのではなく、アルノー、ニコル、バルコスらも別の観点を提供してくれるでしょう⁵⁰⁾。」と述べている。「研究領域全体」とは、さしあたりジャンセニスム運動が直面した神の恩寵と人間の自由意志の問題を指すと考えてよいであろう。A. ル・メートルがメナール教授のあげた四人に匹敵する恩寵論を展開したとはいえない。しかし、ジャンセニスム運動を総合的に捉えようとする見地からは、ル・メートルのような「祈りと沈黙」の中で生涯を閉じた人物にも光りをあてる必要がある。H. ブレモンが「苦行者」としてル・メートルを引き合いに出したのも、彼に隠士の典型的姿をみようとしたりからである。ポール・ロワイヤル修道院には多くの名も知られぬ修道女や隠士たちが存在したことも事実である。論争の渦中、これらの人々やル・メートルは著名な理論家たちとは異なった自己表明の仕方をしたのである。

注

- 1) 「苦行」と訳した原語は pénitance で、一般的には「悔悛、悔い改め」とされる。この件に関しては次のものを参照のこと。飯塚勝久『フランス・ジャンセニスムの精神史的研究』未来社、1984年。拙論、サン・シランの『苦行論』とパスカル、中部大学国際関係学部紀要、No. 4、1988年、pp.45-56。
- 2) Le Maître の綴りは文献によってまちまちであるが、サント・ブーヴ Sainte-Beuve に従う。他に Le Maistre, Lemaistre, Lemaitre と綴られている。
- 3) 『19世紀ラールス』*Grand dictionnaire universel du XIXe siècle*, 1932, Antoine Le Maître の項。
- 4) 同時代人の回想録を除くと全く存在しない。同じく隠士であったクロード・ランスロには Louis Cognet, Claude Lancelot, *solitaire de Port-Royal*, Sulliber, 1950. があり、ル・メートル・ド・サシには Geneviève Delassault, *Le Maître de Sacy et son temps*, Nizet, 1957がある。

- 5) Sainte-Beuve, *Port-Royal* I, Gallimard, 1953, pp.382-383. G.Delassault, op.cit., pp.4-5.
- 6) G.Delassault, op.cit., p. 6.
- 7) Sainte-Beuve, op.cit.I, pp.383-384. G.Delassault, op.cit., pp.5-7.
L.Conget, op.cit., p.223.
- 8) Sainte-Beuve, op.cit.I, p.385.
- 9) Ibid. pp.388-391.
- 10) Lucien Goldmann, *Le Dieu caché, étude sur la vision dans les Pensées de Pascal et dans le théâtre de Racine*, Gallimard, 1955, p.127 (邦訳: 山形頼洋訳, 『隠れたる神』, 上, 社会思想社, 1972年, p.146.)
- 11) Sainte-Beuve, op.cit.I, pp.391-396. L.Cognet, op.cit., p.26.
- 12) Saint-Beuve; op.cit., pp.397-399.
- 13) G.Delassault, op.cit., p.10. Claude Lancelot, *Mémoires touchant la vie de Monsieur de Saint-Cyran* I, Cologne, 1738 (réimp. Slatkine, 1968) p.313.
- 14) Saint-Beuve, op.cit.I, p.397. G.Delassault, op.cit., pp.10-11. René Taveneaux, *La vie quotidienne des jansénistes*, Hachette, 1985, p.49.
- 15) G.Delassault, op.cit., pp.10-11. R.Taveneaux, op.cit., pp.50-51.
- 16) Jean Orcibal, *Saint-Cyran et le jansénisme*, Seuil, 1961, pp.29-32. R.Taveneaux, op.cit., pp.15-17.
- 17) R.Taveneaux, op.cit., p.51.
- 18) 飯塚勝久, 『フランス・ジャンセニスムの精神的的研究』 pp.145-169には同時代人の証言を示す豊富な文献があげられている。
- 19) R.Taveneaux, op.cit., p.45.
- 20) Ibid. pp.45-46. 『ユトレヒト文書』 Recueil d'Utrecht からの引用である。(引用部分の下線は引用者)
- 21) Ibid. p.53.
- 22) Ibid. p.54.
- 23) Ibid. pp.55-56.
- 24) Ibid. p.56.
- 25) Ibid. pp.57-60.
- 26) Ibid. p.68. Antony Mc Kenna, Les petites écoles de Port-Royal, in *Chroniques de Port-Royal*, No.24, 1975, p.14.
- 27) L.Cognet, op.cit., p.36.
- 28) G.Delassault, *La pensée janséniste en dehors de Pascal*, Buchet/Chastel, 1963, pp.145-147.
- 29) R.Taveneaux, op.cit., p.68.
- 30) Ibid. p.69.
- 31) Ibid. p.52.
- 32) Sainte-Beuve, op.cit.I, pp.490-491. III, pp.536-539.
- 33) Ibid. p.530. G.Delassault, op.cit., p.149.
- 34) Frédéric Delforge, *Les petites écoles de Port-Royal*, Cerf., 1985, p.112. Sainte-Beuve, op.cit.I, pp.405-406.
- 35) F.Delforge, op.cit., pp.110-113. ラシーヌ自身がA.ル・メートルをどう受け止めていたかははっきりしない。彼の『ポール・ロワイヤル略史』 Abrégé de l'histoire de Port-Royalではル・メートルを特別に強調して語っているようには見えない。(Jean Racine, *Œuvres complètes* II par Raymond Picard, Gallimard, 1966, pp.37-147) 少年期の恩師の一人とみていたに過ぎないかも知れない。
- 36) Philippe Sellier, Eléments de Chronologie, in *Chroniques de Port-Royal* No.37, 1988, pp.7-8.
- 37) 聖ベルナル (1090-1153) は Saint Bernard de Clairvaux といい、シトー会の祖である聖ベネディクト

ウス Saint Benoitの教えを広めた人物として知られる。（*Grand dictionnaire encyclopédique Larousse*, 1985）

- 38) 田辺保訳, 『パスカル著作集 Ⅲ』, プロヴァンシアル I, 教文館, 1980年, p.189, p.267.
- 39) 『プロヴァンシアル』のタイトルは編者により様々である。歴史的に全部の版について、ここで言及することはできないが、現在よく流布している数版のタイトルを紹介しておく。ブランシュヴィク版全集とラフュマ全集では、Les Provincialesのみである。コニエ版では Les Provinciales ou Les Lettres écrites par Louis de Montalte à un provincial de ses amis aux RR.PP.Jésuites. 『プロヴァンシアル, またはルイ・ド・モンタルトから田舎の友人の一人,あるいはジェズイットの神父らに宛てた手紙』 (*Pascal: Provinciales par L. Cognet*, Garnier, 1965.)
 ル. ゲルン版ではこの後さらに sur le sujet de la morale et de la politique de ces Pères 「同神父らの道徳や策略に関することについて」 (*Pascal: Les Provinciales par Michel Le Guern*, Gallimard, 1987.) とある。
 最後のル・ゲルン版のタイトルは1657年に第二版として出たものと同じである。
- 40) Jean Mesnard, *Pascal*, Hatier, 1967, p.80. (邦訳: 安井源治訳, 『パスカル』 みすず書房, 1971年 p.97)
 Louis Cognet, *Le jansénisme*, P.U.F., 1961, pp.70-71. (邦訳: 朝倉・倉田共訳, 『ジャンセニスム』, 白水社, 1966, p.79.)
- 41) 田辺保訳, 『パスカル著作集V』, プロヴァンシアル関係文書, 教文館, 1983年, pp.305-306.
- 42) J.Mesnard, op.cit., p.110. (邦訳, p.133) ブランシュヴィクの『パスカル全集』には、この文書が収められており、「アントワヌ・ル・メートルとブレイズ・パスカルに帰す」 Attribuée à Antoine Le Maître et Blaise Pascal と添えられている (*Œuvres de Blaise Pascal par Léon Brunschvicg et al.* V II, Hachette, 1914, pp.175-182)。その後の『パスカル全集』, Jacques Chevalier 版や Louis Lafuma 版には収められていない。
- 43) *Œuvres de Blaise Pascal par L. Brunschvicg*, op.cit., VII, pp.198-218. Les Provinciales par L. Cognet, op.cit., pp.385-403. 邦訳: 田辺保訳, 『パスカル著作集V』 pp.9-29. 同書「解説」 pp.303-306を参照。
- 44) Sainte-Beuve, op.cit., II, p.95. サン・ジル Saint-Gilles の証言から。
- 45) J.Mesnard, Les séjours de Pascal à Port-Royal des Champs, in *Société des Amis de Port-Royal*, No.2, 1951, pp.15-28.
- 46) F.Delforge, op.cit., p.200.
- 47) Ibid., pp.199-200.
- 48) Henri Brémond, *Histoire littéraire du sentiment religieux en France*, t.IV, Bloud et Gay, 1920, pp.11-12.
- 49) Ibid., p.8.
- 50) 西川宏人訳, ジャン・メナール, 恩寵の神学と人間学, 『思想』 No.777, 岩波書店, 1989年3月, p.139.